「舞 鶴 市 の 神 様 た ち」2/2　**山本勝眞著**

意宇六社巡り　－その１－ ･･･ 1
意宇六社巡り　－その２－ ･･･ 6
意宇六社巡り　－その３－ ･･･ 13
桑飼地区の神社 ･･･ 19
出雲神社 ･･･ 25
八幡さん（八幡神社） ･･･ 30
奈良「山の辺の道」の三大神社 ･･･ 36
舞鶴の神様たち（貴布祢神社） ･･･ 43
舞鶴の神様たち（金峰神社） ･･･ 49
舞鶴の神様たち（春日神社） ･･･ 53
舞鶴の神様たち（雨引神社） ･･･ 57

本書は、山本勝眞氏が当協会の会報に寄稿された「舞鶴市の神様たち」を、山本氏のご厚意により発行したものです。

平成１９年８月の「天香山命と彌彦神社」を皮切りに舞鶴市内の神社が紹介されています。

筆者：山本勝眞氏略歴

昭和２２年５月生　島根県
昭和４１年４月　海上保安庁入庁
昭和５０年４月　海上保安学校教官
平成１０年４月　名古屋海上保安部巡視船みずほ機関長
平成１２年４月　第六管区海上保安本部船舶技術部長
平成１５年４月　舞鶴海上保安部巡視船わかさ業務管理官
平成１９年４月　海上保安庁退職
平成１９年４月　社団法人日本海海難防止協会舞鶴事務所長
平成２０年１２月　〃　退職
平成３０年４月　瑞宝小綬章　受章

本書記載の内容について

「神様の話については、考古学の研究とともに諸説あるようですが、筆者の見方は、「祖神（かむろぎ）は出雲系にあり」というのが基礎となっております。

読んでいただく方の中には、当然異論をお持ちの方もあると思いますが、あくまで、筆者の持論をもとに書き綴っております。

その点予めお断りいたします。」

【意宇六社巡り　－ その１ －】

（会報 第 125 号 平成 31 年 1 月発行）

11 月 4 日、5 日の 2 日間松江市に行ってきました。

この旅の主目的は、古代出雲国の意宇六社（おうろくしゃ）を訪れることでありました。

本地図は「地理院地図(GSI Maps)」から編集。

古代出雲国というのは、現在の松江市の南寄りを中心に、島根県の東部に栄えた強大な国家で、古事記・日本書紀の神話に多くの記述があることからも、古代日向国とともに、大和国以前 2 世紀ごろに栄えていたのではないかと考えられています。

今回訪れた「意宇六社」※は、この周辺に祀られている六つの神社をいいます。

すなわち、熊野大社、神魂（かもす）神社、八重垣（やえがき）神社、眞名井（まない）神社、六所（ろくしょ）神社、揖夜（いや）神社の六社です。

ちなみに、このうちの六所神社のすぐ隣には、古代出雲国府跡が史跡として保存された場所があり、今も発掘が行われていました。

「意宇」というのは昔の地名で、出雲国風土記（730 年ごろ編纂か？）の国引き神話に、「八束水臣津野命（やつかみずおみつのみこと）（素戔嗚尊（すさのおのみこと）と比定する説もあるようです・・）が『今は国は引き終えた。』ともうされ、御杖を地に突き立てて『意恵（オウェ！）』ともうされたこの地を『意宇』という。」というようなことが書いてあります。

松江市の東寄りに、現在も「意宇町」という町があり、意宇川が中海へと注いで「意宇」という地名などが残っています。

※「出雲國意宇六社めぐりガイドマップ」は、NPO 法人東出雲まちの駅女寅〈http://metora.sakura.ne.jp/?p=1296〉でダウンロードができます。

巡った六つのお社を順番に紹介していきますが、長くなるとおもいますので、数編にわけて、次回以降にも「続編」ということにしたいと思っています。

さて、最初に訪れたのは、「熊野大社」です。「日本火之出初之社（ひのもとひのでぞめのやしろ）」ともよばれ、出雲国一の宮として出雲三大神社の一つでもあります。

実は、和歌山県田辺市本宮町にも熊野大社はあり、全国 3000 社あるといわれる熊野神社の総本山として、現在は、このお社が有名となっていますが、松江の熊野大社こそが本家という主張もあります。と申しますのも出雲でお生まれになった加夫呂伎熊野大神櫛御気野尊（かぶろぎくまのおおかみくしみけぬのみこと）（素戔嗚尊（すさのおのみこと）の諡号）が祭られているからです。

熊野大社全景

現在、出雲地方（松江も含む）で最も有名なお社は言うまでもなく出雲大社ですが、このお社は、以前杵築（きつき）大社と呼ばれていました。つまり現在の出雲大社のあるところは、「出雲」ではなかったということでしょう。

出雲大社の宮司は、代々千家（せんげ）家が継いでおられますが、この千家家というのは、天穂日尊（あめのほひのみこと）の末裔にあたられ、現天皇家と同じ日向系の方であります。

天穂日尊は、素戔嗚尊と大変深いご関係で、天孫族（日向系）の方でありながら、大日霊女貴尊（おおひるめむち）（現天照皇大神）から素戔嗚尊に託されて出雲の地で活躍されたと伝えられています。

出雲大社では、千家家の大切な神事の一つに「火継ぎ」という神事があります。これは、先代がお亡くなりになったとき、お世継ぎは直ちにこの熊野大社に赴き、境内「鑽火殿（さんかでん）」において「燧臼（ひきりうす）」と「燧杵（ひきりきね）」で神火を鑽りだし、宮司を引き継ぐという神事です。

鑽火殿

その鑽火殿は、熊野大社の境内本殿に向かって左の方（南側）にあり、茅葺屋根に、壁は檜の皮で覆われるという、ひら入りの珍しい建物です。

火継ぎの神事は、この地で素戔嗚尊が火を起こすことをお伝えになったという故事によるものですが、そういったことからも素戔嗚尊を祀る熊野大社は、意宇で大変重要なお社の一つとなっているのです。

本殿は大社造りで、男神様を祀ってありますので千木は外そぎ、拝殿も大変立派で、出雲大社には及ばないものの大きな注連縄（しめなわ）がかけてありました。

余談になりますが、ここで注連縄の話をちょっと。

これまで私は、たびたび、鳥居、本殿の建築様式（千木や鰹木）の違いについて触れておりますが、注連縄については触れたことがありませんでした。

読者の皆様は、神社にお参りされたとき、注連縄の向きにや撚り方ついて興味を持たれたことがありますでしょうか。

注連縄

注連縄は、神様の領域と現世の領域とを区別する境界を意味するもので、（鳥居も神域を表すものですが・・・）悪霊の侵入を防ぐという意味があります。

その注連縄ですが、お社によって縄の綯（な）いはじめ（藁でいえば根本の方）が、神殿に向かって右側か左側か、また左綯えか、右綯えかという違いがあります。

熊野大社の注連縄は、綯いはじめが向かって左で、左綯え（捩じりが半時計まわり）でした。出雲大社も同じです。

神社の多くは、綯いはじめが向かって右ということですが、この点からしても、出雲のお社は、お宮の造り、宮司の装束、柏手の数と何かにつけて他の神社と異なるところが多いようです。

話を元に戻します。

境内社としては、お后様の奇稲田姫尊、同姫のご両親の足名椎尊、手名椎尊、さらには伊弉諾尊・伊弉冉尊、宇迦御魂（素戔嗚尊の六子）の方々が祭られていました。

伊弉諾命・伊弉冉命は日向系の神さまですが、熊野大社は、出雲国造（天穂日尊）が創建されたことから御祖父母神も祀られているのではないでしょうか。

奇稲田姫尊、足名椎尊、手名椎尊は、素戔嗚尊の八岐大蛇退治神話に登場されます。また宇迦御魂は、稲荷大明神で新潟の弥彦神社に保食の神さまとして祀られています。

境内にある唐獅子は大変立派でした。

古代史研究家原田常次氏は、著書「記紀以前の資料による古代日本正史」の「日本人の風俗習慣」の章「神社の門番」の項で、出雲の古い神社にはみんな門番が動物であると紹介されるなかで、『いまはたいていおとなしく座っている獅子が多いが、その前は（出雲のお社のように）尻を立てて、頭を地面につけて、いまにも飛びかかる形のすさまじい獅子だった。』と出雲地方のお社の獅子についてのべておられます。

獅子

熊野大社の門番も、ふるく苔むしてはいましたが、この例のとおりでした。

もちろん一対の獅子でしたが、残念ながら、写真は一頭だけ（しかも逆光）しか撮影していません。

境内の北側（本殿に向かって右）にある休憩所の建物の中に、大きな絵が掲げられていましたが、神話の場面を描いたもので、絵の左寄りは素戔嗚尊の「大蛇退治」、中央付近のは大国主の「因幡の白兎」、また右の方は「出雲の国譲り」の場面だと思われました。

休憩所内の絵

熊野大社の前には川が流れていますが、この川は、中海へと注いでいる「意宇川」の上流にあたります。

「古代創建当時は、意宇川のさらに上流の源流になる熊野山（現在は「天狗山」）にあったが、中世になって、麓におり上の宮と下の宮とに分けて二社祭祀の形をとっていた。明治になって上の宮を下の宮（現在の場所）に奉遷合祀（ほうせんごうし）され一つの社となった。」ということが、お社入口の説明書きに書いてありました。

お社へは、駐車場から一の鳥居をくぐり、意宇川にかかった朱の橋を渡り、さらに二の鳥居をくぐってお参りしましたが、とても荘厳な感じのするすばらしいお社でした。

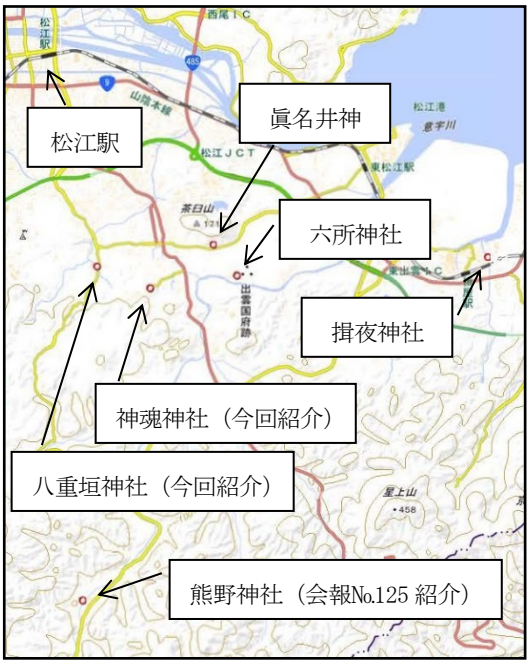
熊野大社への参道

次回、神魂（かもす）神社と八重垣（やえがき）神社についてご紹介します。

【意宇六社巡り　－ その２ －】

（会報 第 126 号 令和元年５月発行）

前回に続き、昨年（平成 30 年）11 月４日、５日の２日間松江を訪れた際に立ち寄った古代出雲国の意宇六社のうち、今回は神魂神社と八重垣神社についてご紹介します。



改めてお話ししますが、「意宇」というのは昔の地名で、出雲国風土記（730 年ごろ編纂か？）の国引き神話に、「八束水臣津野命（素戔嗚尊と比定する説もあるようです・・）が『今は国は引き終えた。』ともうされ、御杖を地に突き立てて『意恵！）』ともうされたこの地を『意宇』という。」というようなことが書いてあります。

松江市の東寄りに、現在も「意宇町」という町があり、意宇川が中海へと注いで「意宇」という地名などが残っています。

本地図は「地理院地図(GSI Maps)」から編集。

古代出雲国というのは、現在の松江市の南寄りを中心に、島根県の東部に栄えた強大な国家で、古事記・日本書紀の神話に多くの記述があることからも、古代日向国とともに、大和国以前２世紀ごろに栄えていたのではないかと考えられています。

神魂神社の鳥居

神魂神社は、六つの神社、つまり「意宇六社」のうちの１つです。

松江市大庭町というところに神社はあり、神社の下に駐車場があって、駐車場から道路

を隔てて神社へ上る道の石段があります。神社へは急な石段を登っていく方法と、女坂（めざか）というやや平らな坂道を登るのと二つのアプローチがありますが、急な石段のほうもたいしたことはありませんでした。石段（または女坂）を登りきったところに、ひっそりとながらもこの神社は厳かに祀られています。

と申しますのは大変静かな場所にあり、また建物が大変質素で古びて見えるからそう感じるわけですが・・・。もっとも国宝であるため新たに手を加えることができないからかもしれませんね。

私が訪れたときにもほかに参拝者はなく、通常でも来られるひとはあまり多くないのではと感じました。

神魂神社本殿は、昭和 23 年の修理の際に、柱から正平元年（1346 年）の墨書が見つかったことから、現存する最古の「大社造り」建造物であることが明らかになり、昭和 27 年３月に国宝に指定されました。現在の建物は、安土桃山時代の天正 11 年（1583 年）の建造と考えられるとのことです。

ちなみに元号「正平」は、南北朝時代の南朝の元号で、北朝では「貞和２年」ということになります。

出雲大社と同様に、入口は正面に向かって右に片寄っていますが、神座は出雲大社とは反対に、殿内の中心に建つ心御柱（しんのみはしら）の左奥に横向きに置かれています。

特徴として、本殿屋根の千木の先端は水平に切った形の内そぎで、そして前後の中央の柱（宇豆柱（うずばしら）と言います）がそれぞれ前と後ろに出っ張っています。

神魂神社

本殿はまた、床が正方形田の字型で、他の五社に比べとても高い（高床）造りになっていました。

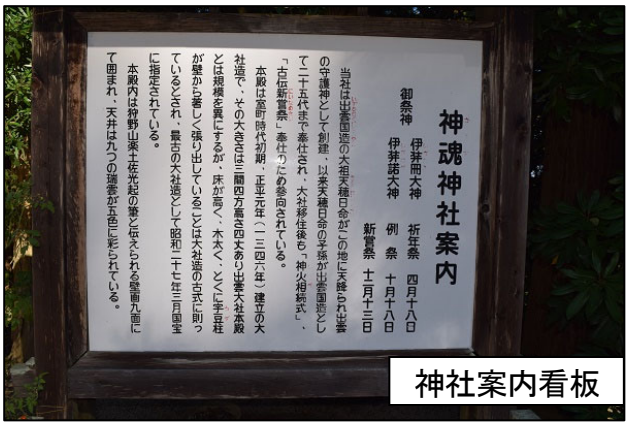
また出雲大社より大社造りの古制をよく保存しているとのことであります。

残念ながら内部を拝見することはできませんが、内壁面には彩色を施した壁画があるということでした。

創建は、天穂日命（あめのほひのみこと）が出雲に来られた時代ということですから、だとすれば２世紀後半の頃の話にということになります。この方は日向系の方で、現出雲大社の宮司千家の大元の祖先にあたられ、母神様は、大日霊女貴尊（おおひるめむちのみこと）（現天照大神（あまてらすおおかみ））です。

天穂日命は幼いころ、素戔嗚尊（すさのをのみこと）が大日霊女貴尊から託され、出雲に来られたという話があります。

現在神魂神社の主祭神は、天穂日命の祖父母、伊弉冉尊（いざなみのみこと）と伊弉諾尊（いざなぎのみこと）ということになっていますが、神社の千木が内そぎであることは、女神を祀った神社の特徴でもありますので、最初伊弉冉尊おひとりが祀られていて（神魂神社案内看板にも伊弉冉大神と先頭に書かれています。）、後で伊弉諾尊を合祀されたのかなぁ～と思う一方、いやいやもとは母神様の大日霊女貴尊を祀られたのでは・・・？とも思っています。



神社案内看板

根拠のない私見ではありますが、天穂日命が日向の懐かしい母大日霊女貴尊を祀られたという方が、物語的にも自然とも思うし十分有り得ることです。

前回の稿も熊野大社のところで、出雲大社の「火継ぎ神事」についてお話ししましたが、以前は神火の鑽りだしは、神魂神社で行われていたとのことです。

私は、今回の訪問までは、「火継ぎ神事」は現在でも神魂神社で行われていると思っていたのですが、間違いでした。

続いて八重垣神社についてお話させてもらいます。

八重垣神社鳥居

この神社は、素戔嗚尊の大蛇退治にゆかりある神社で、尊が大蛇退治の際に稲田姫（後に尊の妃となられた方で、櫛稲田姫とも申されます。）をお隠しになったといわれている佐久佐女の森（神社境内の奥の院）の場所にあります。

現在の松江市佐草町です。

神話での大蛇退治は、八頭八尾の大蛇を退治したという話になっていますが、実は出雲の豪族八俣遠呂智と戦った木次事件の話でして、このとき遠呂智が自分のものにしようとした美女稲田姫を、この佐久佐女の森の大杉の周囲に八重垣を作ってお隠しになった。（すでに拉致されていた姫を遠呂智の館に攻め込んで救出したあと、奪い返されないように保護されたという話もあります。）

そして戦いに勝利したあと、姫を娶られ、この地に宮づくりをされて夫婦で住まわれた。これが八重垣神社の始まりということになっています。

現在、出雲大社（明治時代になる前は杵築大社と呼ばれていました。）は縁結びの神様としてあまりにも有名ですが、もともとはこの八重垣神社が縁結びの神様の本家本元ということになっています。

八重垣神社は平地にあり、規模は出雲大社には及ばないものの、大変立派なお社でした。素戔嗚尊をお祀りする神社なのですが、神魂神社同様に千木が内そぎで女神様をお祀りする特徴を示しています。理由は残念ながらわかりません。

和歌の歌碑

木次事件で匿われた稲田姫も祀られているので、あながちおかしいこともないのですが・・・。

素戔嗚尊がお詠みになったと伝わる、我が国最古の和歌といわれております、

「八雲立つ　出雲八重垣　妻込めに　八重垣造る　その八重垣を」

と彫り込まれた歌碑も、この神社境内にありました。

男性のシンボル

また、この神社には、立派な「男性のシンボル」が祀られていてびっくりしましたが、子宝に恵まれるようにという願いを込めたものと言われていますから、こういったことからも、縁結びの神様として祀られているのかもしれませんね。

境内に祀られた神様としては、天照大神、足名椎命・手名椎命（このお二人は稲田姫のご両親）のほか、そうそうたる神々が多く祀られていて、さすが、古代出雲の創始者、素戔嗚尊ご夫婦のお宮という感じがしました。

平成 29 年 9 月発行の本会報第 121 号で紹介しました、9 世紀の終わり平安時代の作と伝わる素戔嗚尊、稲田姫、大日霊女貴尊（現在の天照大御神）、市杵嶋姫（宗像大社や厳島神社の御祭神）そして足名椎命・手名椎命の彩色壁画は、この八重垣神社の本殿内に残されていたもので、現在は、神社宝物殿に国の重要文化財として保管、展示されています。

八重垣神社全景

神社はやはり大社造りで、神座は出雲大社と同じ配置となっています。

ここで「大社造り」について、少し触れさせていただきます。

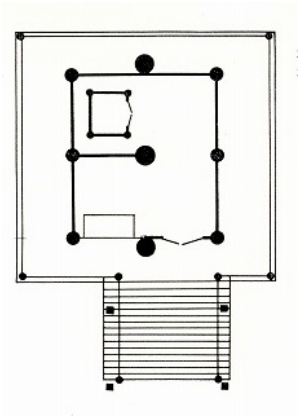
古代神社建築様式の神殿の作り方の一つでありまして、特徴としては、屋根が頂部の棟から、両側に流れ、山形が見える方に出入り口がある「妻入り」で、古代の日本の住居がもととなっているといわれています。

大社造り

また、大社造りの本殿の開口部（出入口）と階（きざはし）は、正面の右側に片寄って設置されているのももう一つの特徴であります。

右の図は、大社造り本殿の配置を示すものですが、

中央の●は、心御柱（しんのみはしら）とよばれ、この奥が神座（図中のコの字形）となっています。この図は、神魂神社の場合でして、神座の位置と向きは神社によってまちまちです。出雲大社の場合は、（八重垣神社もおなじですが）右奥で反対向きの配置となっています。



本殿配置図

図の上下の大きい●二本は宇豆柱（うずばしら）といって心御柱とともに棟を支える柱、そして後の６本は神殿を形作る側柱（がわばしら）といいます。

ちなみに、もう一つ古代神社建築様式には、「神明造り」と呼ばれるものがありますが、それは古代高床式穀物倉庫から発展したといわれ、三重県の伊勢神宮がその代表格で日向系の神様を祀った神社は、この形が多いようです。

屋根はやはり切妻ですが、「平入り」といって出入り口が屋根の流れた方（屋根が水平に見える側）の中央にあり、上から見ると長方形の形になっているのが特徴です。

神明造り

【訂正とお詫び】

前回、宇迦御魂は、新潟の弥彦神社に祀られていると書きましたが（会報第125号、26ページ）、新潟弥彦神社に祀られているのは天香山尊（あめのかやまのみこと）です。訂正とお詫びをいたします。

「大社造り」、「神座」、「神明造り」のイラストと記事の一部はインターネットのグーグル画像検索などから引用させていただきました。

【意宇六社巡り　－ その３ －】

（会報 第 127 号 令和元年９月発行）

前回までに意宇六社のうち三つのお社、すなわち熊野、神魂、八重垣のそれぞれの神社と神社にまつわるお話をしてまいりましたが、今回は、第３弾として、残りの三社について紹介したいと思います。

その神社は、六所神社、揖夜神社、眞名井神社の三社です

以前にもお話しましたが、古代出雲の国は現在の出雲地方ではなく、宍道湖の東、現松江市内の南寄りを中心に、島根県の東部に栄えた強大な国家で、古事記・日本書紀の神話に多くの記述があることからも、古代日向国とともに、大和国以前２世紀ごろに栄えていたのではないかと考えられています。

本地図は「地理院地図(GSI Maps)」から編集。

まず、六所神社から話を進めてまいりましょう。この神社は松江市大草町の出雲国府跡遺跡のすぐそばに鎮座されており、田畑の真ん中のこんもりとした杜の中にあります。

鳥居は木造明神形で、本殿の千木は外そぎ、勝男木は奇数の３本。つまり男性の神様を表す特徴を示しています。もちろん大社造りのお社です。

六所神社は、意宇六社の一の宮で、古くから六所さんとも称され崇敬されてきたそうです。

皆様は、もちろん暦の 11 月の別称を「神無月」と呼ぶことをご存じですが、これは全国の神々が、出雲にお集まりになるとの故事からそう呼ばれるのでありまして、出雲では「神有月」と呼ばれています。

陰暦 10 月出雲へお集りになる全国の神々は、先ず当社へお集まりになってから会議場所の佐太神社（松江市内）へおいでになるのだということが、佐太神社の記録にもあり、六所神社も、神在祭（かみありさい）が行われていたそうです。

六所神社石碑

そのように、この神社は「出雲国総社」という社格を有していて、このあたりの神社を管理・統括していた神社であります。

当社の神紋は、亀甲に「有」の文字ですが「有」を分解すると「十」「月」となるといった面白い話もあります。

もっとも 10 月に全国の神様がお集まりになるとのいわれは、時代がずーっと下ってからのことで、もとは出雲の国譲りの後、出雲地方を統治した猿田彦尊（さるたひこのみこと）が域内 180 余りの集落の長（神）を、佐多神社に呼んで会議を開かれたのが事の始めで、そのことが後世日本国中の神々がお集りになるということになったのだということであります。

ご祭神は、伊弉諾尊（いざなぎのみこと）、伊弉冉尊（いざなみのみこと）、天照大神（あまてらすおおみかみ）、月夜見尊（つきよみのみこと）、素戔嗚尊（すさのおのみこと）、大己貴尊（おおあなむちのみこと）であります。

六所神社本殿

古事記神話によれば、天照大神、月夜見尊は、伊弉諾尊が黄泉の国（よみのくに）からお戻りになり阿波岐原で禊をされたおり、左目から天照大神、右目から月夜見尊、鼻から素戔嗚尊がそれぞれお成りになったとあ

ります。

「古事記原文『於是、洗左御目時、所成神名、天照大御神。次洗右御目時、所成神名、月讀命。次洗御鼻時、所成神名、建速須佐之男命。』・・と」

まあ話としては面白くても、このような話は現実にはあり得ないわけでありまして、実のところは、天照大神は大日霊女貴尊のことで伊弉諾尊、伊弉冉尊のお子神様、つまり日向系の方。素戔嗚尊は布都御魂のお子神様で出雲系の方。大己着尊は、素戔嗚尊のお子神さま須世理姫の養子さんです。月夜見尊に比定する方は、実在がはっきりしないというのが実際のところ（原田常治著「古代正史」による）のようです。

次に揖夜神社です。

この神社は、松江市東出雲町揖屋に鎮座されており『出雲国風土記』によれば、伊布夜（いふや）社として記載されている古社とあります。

揖夜神社本殿

『古事記』によると伊弉諾尊は、亡き妻神伊弉冉尊を慕って黄泉の国へ行かれたという話の中で、黄泉の国の入口黄泉比良坂は、出雲国の伊賦夜坂であったと書かれています。もちろん神話の世界ですので、現実にはあり得ない内容ではありますが・・・。

以下は、古事記が伝えるところの、伊弉諾尊が、黄泉の国から逃げ帰られたとき、黄泉の国（死者の世界）との国境で追っ手を封じるために大石で蓋をしたくだりの原文です。

「古事記原文『亦云、以其追斯伎斯此三字以音而、號道敷大神。亦所塞其黄泉坂之石者、號道反大神、亦謂塞坐黄泉戸大神。故、其所謂黄泉比良坂者、今謂出雲國之伊賦夜坂也。』」

つまり、黄泉比良坂は出雲の国の伊賦夜坂であるというわけですね。

わたしは、ずーっと以前から、古事記（また日本書紀）の記述は、７世紀の終わりから８世紀の初めにかけて、当時の為政者（日向系）により編纂され、主に日向系神様の偉功を中心に書かれていて、必ずしも相いれないと思ってはいますが、黄泉比良坂が出雲の国にあるのだというあたりは、素戔嗚尊や饒速日尊の存在と合わせて、どうしても出雲国をないがしろにできない理由があったのだと、大変面白いとは思うのです。

神社と山を挟んで反対側の揖屋町平賀に「神蹟黄泉比良坂伊賦夜坂伝説地」の石碑が建っているそうなのですが、残念ながら訪れることができませんでした。

本殿は大社造りで、神殿配置は神魂神社と同じく、神座は左から右に向かっている（出雲大社と反対）のが特徴です（由緒書看板記述による）。またこれも見学はできませんでしたが、内壁には、五色の極彩色の神事の障壁画（県文化財）が描かれているそうです。

揖夜神社由緒書看板

鳥居は石造り明神型、千木は内そぎで女神さまの特徴を表しています。

境内社の案内

ご祭神は、伊弉冉尊、大己貴尊、少彦名尊（すくなひこなのみこと）、事代主尊（ことしろぬしのみこと）とあります。

少彦名尊は大国主命（大己貴尊）を助けて出雲の国の経営にご尽力された。

また事代主尊は大己貴尊のお子神様です。

境内社としては、本殿向かって左に「韓国伊太氏神社（五十猛尊）」、右側に「美穂津姫神社」がお祀りされています。

五十猛尊は、素戔嗚尊のお子神（ご二男）、美穂津姫（別称多紀理姫）は、大己貴尊の日向における妻神様で事代主尊の母神様であります。

最後に眞名井神社です。

眞名井神社の鳥居と石碑

島根県松江市山代町字伊弉諾 84 鎮座のこの神社は、拝殿が島根県指定建造物です。急勾配の石段を登ったところに神社があります

鳥居は石段を登る前にあり、木製明神形　本殿は大社造り、千木は外そぎ、勝男木は３本で男神様を祀る神社の特徴をあら合わしています。

揖夜神社が女神伊弉冉尊を祀っておられるのに対し、こちらは伊弉諾尊を祀っていて、お二人はご夫婦であります。

また境内の掲示板には

「県指定建造物　真名井神社本殿　昭和 49 年 12 月 27 日指定

社殿は、本殿、中門、拝殿、神楽殿、境内社からなる。本殿は大社造り檜皮葺で周囲に透塀をめぐらす。」

名井神社掲示板

「当社は出雲国風土記にいう『真名井社』、延喜式に記す『真名井神社』で、古い歴史をもつ意宇六社の一社である云々。」と書かれていました。

また、「祭神は伊弉諾尊・天津彦根尊（山代直の祖）であ

る。」・・・とも。

さらには、「背後の山は神名樋山（火山）で出雲国四神名樋山の一つで、東山麓に真名井の滝を存す。」

などと説明がなされています。

この滝は、高さ 30 メートル余りの枯れることのない、小さな美しい滝らしいなのですが、残念ながら訪れることができませんでした。

真名井神社本殿の屋根

境内社としては、本殿に向かって右に末那為神社、向かって左に児守神社（宍道若宮社・山代神社・荒神社合祀）があります。

末那為社のご祭神は宇迦御魂（お稲荷様）とありました。

昨年 11 月４日、5 日の２日間にわたってめぐってきました意宇六社に祀られている神々を改めてみてみますと、それぞれに天孫族（日向系）と出雲系の偉大な神々が、ここに祀られています。

九州地方には、素戔嗚尊と饒速日尊を祀る八阪神社が圧倒的に多いこと、出雲の国（現松江市）に多くの天孫族の神々が祀られていることなどを考え合わせると、今回の意宇六社巡りは、改めて出雲の国が大和朝廷建国以前の古代日本国にとって、いかに大きな存在であったかと思いしらされます。

今回は、私が廻った意宇六社にスポットをあてて紹介しまたが、実はこのあたりには、まだ相当の数の神社が存在します。

魏志倭人伝の記述から、おそらく邪馬台国は南九州日向地方（異説はたくさんありますが）にあったもので、出雲の国が中心であったとは言いませんが、大和朝廷建国に大きな影響力があったことは容易に想像できるのです。

この稿を書き終えた今日は、７月 12 日。くしくも昭和 59 年の今日、出雲の荒神谷遺跡で 358 本もの銅剣が発見され、古事記神話に封じ込まれ存在が疑問視されていた、古代出雲の国が現実のものとなった記念すべき日であります。

３回にわたって紹介した「意宇六社巡り」の稿を終わりにします。

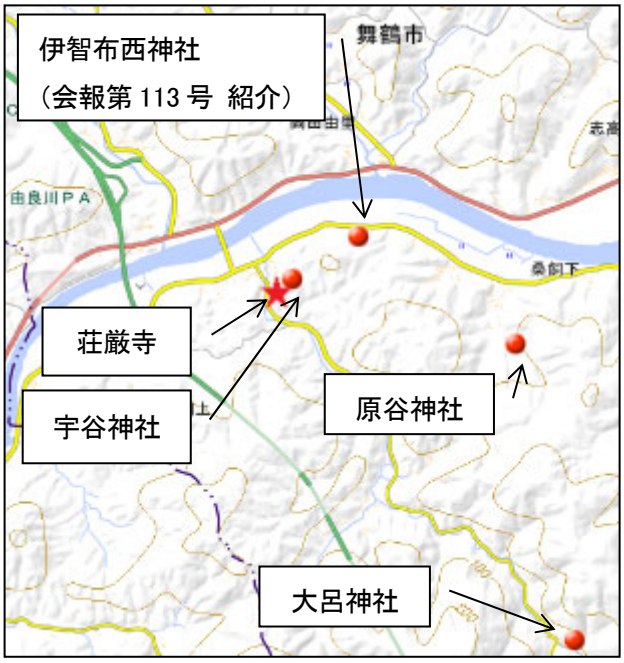
【桑飼地区の神社】

（会報 第128号 令和２年１月発行）

以前「伊智布西（いちぶし）神社」を紹介しました。（会報第113号平成26年12月発行）

この神社は舞鶴市の桑飼地区という場所にあります。「丹後太郎」の異名を持つ暴れ川「由良川」の川沿いで、舞鶴市の南西のはずれに当たります。

今回は、この桑飼地区にある幾つかの神社を紹介したいと思います。



本地図は「地理院地図(GSI Maps)」から編集

それではまず、「原谷神社」です。

舞鶴から国道175号線を福知山・宮津方面にむかい、由良川大橋の手前の藤津交差点を左折して、府道55号線を由良川沿いに上っていきますと、舞鶴市のはずれに桑飼地区があります。

「伊智布西神社」は、府道55号線脇にあるのですが、その伊智布西神社から約１キロメートルほど舞鶴寄りに戻ったところ（藤津交差点からは約５キロメートル）に南へ入る道があり、ここから約300メートルほど向かうと一軒の農家の裏手に原谷神社が見えてきます。

原谷神社全景

境内は少し広々とした原っぱのようになっていて、すぐ後ろは山に面しているのですが、多くの神社の境内がこんもりと

した古木に囲まれて昼なお暗きという荘厳なイメージなのに対して、この神社は大変明るく開放的な場所に鎮座されています。

石造りの鳥居（明神型）をくぐり、石段を四段登り左に折れて本殿に向かう形になっています。そして本殿前には、一対の石灯篭と狛犬（唐獅子）がありました。

神殿は、覆屋に守られており、この覆屋は単純な流造風の木造トタン葺きになっています。

ご祭神は、奥津彦命（おきつひこのみこと）、奥津姫命（おきつひめのみこと）、火産霊命（ひむすびのみこと）（火之迦具土命（ほのかぐつちのみこと））の三柱の合祀となっています。これら三柱の神様はいずれも火に関連する神々で、特に奥津彦命、奥津姫命は竈（かまど）の神様、また火産霊命はそのものずばり火の神様です。

古代から、煮炊きのための火と竈は、食の生活に欠かせない大事なものだったに違いありません（もちろん現在でもそうですが・・・）。

しかし、また火は火事という災いを招くことで、恐れられた一面もあり、そういったことから、昔から「荒神さん」として大切に祀られてきました。

今でこそあまり見かけませんが、私の幼少のころは、台所の竈の近くに「荒神さん」のお札が掲げてありました。

読者の皆さんの中にも、同様のご記憶がある方もあるかもしれませんね。（あるいは、今でも家々によっては祀ってあるかもしれませんが・・・）

ちなみに、全国に愛宕さん、秋葉さんと呼ばれる神様が多いのですが、こちらも火にまつわる神々で、お二方は火災から家を守る、いわゆる火除けの役割を担っておられることから、荒神さんに含まれるのかもしれません。

原谷神社の境内社

境内社は、本殿に向かって左隣りに一社、鳥居と本殿の間に二社と合わせて三社が祀られています。いずれもご本殿と同様、覆屋に覆われた小さな祠で、三柱の神様は、それぞれ「若宮神社」、「毘沙門（びしゃもん）神社」、「山祇（やまづみ）神

社」です。

若宮というのは、読んで字のごとく、祭神のお子神様のことなのでしょうが、どなたかはわかりませんでした。

実は、「若宮」と名のつく神社は、全国にはたくさんあり、舞鶴市にも若宮神社は５社あります。中舞鶴地区(余部上)の若宮さんのように「八幡若宮（応神天皇のお子神）」としてご祭神がはっきりしているものもあれば、そうでないものもあり、それぞれの神社で確かめるほかないようです。

毘沙門神社は、神社としてはちょっと珍しいですね。

もちろん毘沙門天(びしゃもんてん)が祭神ですが、この神様は、仏教寺院の主仏様の守護神としてよく知られています。仏像のタイプとしては「天部(てんぶ)」に分類され、もとはインドのバラモン教の諸神のお一人で、多聞天(たもんてん)とも称され、東西南北四方位のうち北方の守護神とされています。

ちなみに、東方面は「持国天」、西方面は「広目天」、南方面は「増長天」がそれぞれお護りになっておられます。

日本では仏教と習合して、四天王、弁財天、帝釈天、吉祥天などの神様が仏像としてとり入れられているようです。

山祇の神様は、全国には数えきれないほどたくさんありますね。愛媛県の大山祇神社が総本山で、もともとは字のごとく山の神様と思われますが、現在は海の神様としても崇拝されているようです。

次に「宇谷神社」です。

冒頭の伊智布西神社から西（福知山方）へ約 400 メートルほど行ったところに南側に入る道があり､左に折れて 50 メートルほど入ると桑飼下宇谷集落があります。こちらには曹洞宗のお寺「荘厳寺」というのが

宇谷神社参道

あり、その裏手を 100 メートルほど登った山の上に宇谷神社は鎮座されています。

参道は、急な坂道で、鬱蒼とした杉の木立と竹に覆われた舗装のない山道を登っていくと、途中からは苔むした石段になっていて、明神型の木製鳥居をくぐるとご本殿に着きます。

木製格子状の壁とトタン葺き屋根の覆屋に守られた、覆屋内の神殿はしっかりと保存されていて、神殿階の向かって右の柱に「伊邪那岐命」と表記された木札が取り付けてありました。

宇谷神社ご本殿

ご祭神は「伊邪那岐命（いざなぎのみこと）」で、この方は、ご存じのとおり記・紀神話で、「伊邪那美命（いざなみのみこと）」とともに、万の神々を創造されたとされている神様ですね。

境内社は、向かって左に一棟三連（山の神社、大川神社、大神宮社）の祠。さらに三つの赤い鳥居をくぐって４～５メートル上がったところに、二棟の祠があり、一つは、金毘羅さんと秋葉さん、そして、もう一つはお稲荷さん、そして屋根代わりに大石を載せた一見灯篭のような祠には、愛宕さんがそれぞれ祀られていました。

境内社の「山の神」は、文字通り山をつかさどる神様ということで、あるいは大山祇の神のことでしょうか。

大川神社は、食の神様。

大神宮社は、これはよくわかりませんが、一般的に言えば、神宮という神社の格は天皇家を祀る社の称号として使われているので、その神宮とは少し違うような気がします。

奈良の桜井市に大神（おおみわ）神社といって饒速日命（にぎはやひのみこと）を祀った神社がありますので、あるいはその神社から勧請したのかもしれません。

金毘羅さんは、香川県の琴平町にある金毘羅大権現（ご祭神は大物主命（おおものぬしのみこと））。秋葉さんは「火産霊命」。そしてお稲荷さんは、食の神「宇迦御魂（うかのみたま）（倉稲魂命（くらいねたまのみこと））」です。

最後に「大呂神社」を紹介します。

冒頭の伊智布西神社から西（福知山方）へ約 500 メートルほど行ったところに宇谷交差点（曹洞宗のお寺「荘厳寺」の近く）府道 55 号線から府道 491 号線に入り、南に向かって４キロメートルほど登ると、桑飼上地区のはずれにあたる大呂地区にいたります。

この地区は府道 491 号線区で終地点といってもいい集落で、この先にも道は伸びていましたが、ここから奥は、ほとんど車は行かないというようなところでした。

グーグル地図を開くと、この神社は、神社名を「稲荷、愛宕、山の神」と表記されていましたが、これが大呂神社です。神社名は地名をとったのでしょう。

神社の登り口は三叉路になっていて数メートル石段を上がったところに石造りの明神型鳥居があり、同じ地盤に一棟三連の脇宮（境内社）があり、ご本殿はさらに２メートルほど上で、木製覆屋に囲われて鎮座されていました。

大呂神社ご本殿

ご神殿は、木造の流造で丁寧な彫刻が施された美しい神殿ですが、残念ながら覆屋とともにかなり老朽化して痛みが激しい状態でした。

ご祭神は熊野十二社大権現とありますので熊野から勧請されたものとおもいます。

熊野十二社とは、熊野本宮大社、熊野速玉大社、那智大社の熊野三社に祀られた十二柱の神々のことをいうそうですが、詳しいことは把握できていません。

中段の境内社は、「稲荷」、「愛宕」、「山の神」の各神様の表札がかけてあり、稲荷には朱塗りの祠、愛宕には石灯篭の頭の部分、山の神には丸っこい石が祀られていました。

大呂神社境内社（中段）

ご本殿に向かって右側に一つの境内社がありましたが、ご祭神はわかりませんでした。

境内社の神々については、前述の各神社で紹介しているので省略させていただきます。

ちなみにこの稿で紹介した三つの神社名はすべて所在地の地名と一致しています。

なお、以前にも触れたことがありますが、神様の尊称には、「尊」と「命」の両方が使われています。「尊」の方をより格の高い神様にあてているようですが本稿では「命」に統一して記述させてもらいました。

今回、桑飼地区の神社の取材に当たっては、桑飼宇谷地区にある荘厳寺の村田和尚さんに、多くの貴重な資料をいただきました。参考にさせていただきました。

こころからお礼を申し上げます。

※　本寄稿のバックナンバーは、当協会ホームページ、事業紹介、会報の発行を参照。

http://nikkaikb.com/

【出雲神社】

（会報 第 129 号 令和２年５月発行）

今回は、舞鶴市内にある、出雲神社について紹介したいと思います。

まずその前に、島根県出雲市にある、縁結びの神様で知られる出雲大社は、読者の皆様もよくご存じのとおり大きな神社で、縁結びの神様として大國主尊（おおくにぬしのみこと）を主祭神としてお祀りした神社です。

本地図は「地理院地図(GSI Maps)」から編集

実は出雲大社にお祀りされている神様を祀った神社は、全国に結構たくさんあります。

今回ご紹介する舞鶴の出雲神社もその一つであり、御祭神は、もちろん大國主尊です。

東舞鶴地区を東西にまっすぐ伸びた国道 27 号線、その西の端、突き当りのT字路で南北に分かれます。

そのT字路を南側に折れて、緩い右カーブに沿って 400 メートルほどいきますと、左側にこの神社が鎮座されています。

本通りから 50 メートルほど入ると、神社に上る石段があり、上っていくと、石造りの明神型鳥居（笠木両端が上側に反っている形の鳥居）があります。鳥居には「出雲神社」と彫り込まれた石造りの額がかけられていて、「大正十二年七月」と刻印がありました。

出雲神社に上がる石段

出雲神社鳥

鳥居からさらに数段上がると神社に至り、周囲ガラス張り瓦葺きの拝殿、そして、その奥に御本殿が連なっています。

拝殿の前には、左右一対の唐獅子があり、かなり古いものらしく苔むしていて、左側の獅子は下あごが割れて失われていました。

唐獅子（顎が欠けてい

ご本殿の千木（ちぎ）は内削ぎ（うちそ）（千木の先端が水平の形）、鰹木（かつおぎ）は三本、屋根は銅板葺きという立派なお社で、舞鶴では大きいほうです。

御祭神は、もちろん大國主尊です。

いわゆる大社造りではありませんが、正面入り口が屋根の三角側に配置されるという、妻入りの形で、出雲のお社の特徴を示す本殿の造りとなっています。

ちなみに大社造りは、正面中央に宇豆柱（うずばしら）があるため、御本殿入口が向かって右側に偏っているのが特徴です。

出雲神社後拝殿

出雲神社の境内社

筆者は、千木が内削ぎの神社は、ふつう女神様を主祭神とする社の場合との認識ですが、この神社の祭神が大國主尊という男神様なのになぜか外削ぎではありません。（反して外削ぎは先端が上に向かってとがっている形になっています。）

ただ鰹木は、男神様の特徴を示す奇数（三本）ではあります。

境内社は、ご本殿の向かって左側に三社ありましたが、中央の社は小さな狐が護って

いましたので、宇迦御霊すなわちお稲荷様と思われます。

両脇の二社の御祭神は残念ながら、どなたか判りませんでした。

今回は、せっかくですので、大國主尊にまつわるお話をさせていただきます。

出雲大社のご祭神は、現在は大國主尊で別名を大己貴尊と申されます。

この神様は、二世紀の後半（160 年ごろか？）のお生まれで、素戔嗚尊の末子須世理姫の養子となられ、義父素戔嗚尊が亡くなられた（185 年ころか？）あと、後継者として出雲・日向（九州全域を含む）の国を、およそ 185 年ころから 30 年間統治された神様です。

古事記では、高天原の天照大神に（出雲の国）の国譲り神話として語られていますが、実際は、大己貴尊の死後、出雲・日向地方の統治を、大日霊女貴尊（現天照大神）が継承されたということのようです。

いずれにしても、豊葦原中國（出雲などの国々）の統治権を高天原族（日向族）に譲ったという功績からでしょうか、古事記では神話の中ではありますが、この方の話は、他の出雲の神々に比べて多くが語られています。

大己貴尊は、今日では、文武両道の偉大な神様として崇拝されていますが、どちらかと言えば医学・獣医学・農業・林業についての知識に優れた学者肌の神様だったようです。

また、大変浮気性（？）な方で、稲葉國の八上姫（最初の妻）素戔嗚尊のお子神須世理姫（本妻）、高志國の沼河姫、あるいは日向國の多紀理姫などがおられ、須世理姫とのあいだに武御名方富尊（現諏訪大社の御祭神）、八上姫とのあいだに木俣神、そして、多紀理姫とのあいだに阿遅鉏高日子根尊（八咫烏）や事代主尊（恵比寿様）などのお子神様がおられます。

素戔嗚尊は、まず出雲の国を統一した後、富山（高志國あるいは越國といった）から日本海側に沿って遠征し、175 年ころには出雲・日向（九州全土を含む）という広大な国を統治されるようになりました。

素戔嗚尊には八柱のお子神様がおられますが、妹須世理姫の養子として国を相続することをよしとしない八十神(やそかみ)様達(兄神様たちで「八十」とは大勢ということを表しています)に大変いじめられたという話が、古事記神話の大國主尊の項で語られています。

実際の素戔嗚尊のお子神様は、男子5人女子3人でこの方達は、京都の八坂神社にお祀りされていて、このうち男子の神様は、上から八島野尊(やしまぬのみこと)、五猛尊(いたけるのみこと)、饒速日尊(にぎはやひのみこと)、倉稲魂尊(くらいねたまのみこと)、磐坂彦尊(いわさかひこのみこと)の5人の方々であり、いずれも大己貴尊をいじめるような方々ではなく、長男の八島野尊は、諡号を「清之湯山主三名狭漏彦八島野尊(すがのゆやまぬしみなさろひこしまぬのみこと)」と申されて、父素戔嗚尊が九州地方中心に遠征されておられる間、根拠地出雲の国をしっかりとお守りされていました。

二男の五猛尊は、朝鮮半島に出向いた際に沢山の木の実を持ち帰り、妹神様と全国に配って歩いた(植林事業)。三男の饒速日尊は、父神様と遠征を共にされ、また三世紀期初頭に、神武天皇が大和で初代天皇として即位される前、その大和の大王として統治された。四男の倉稲魂尊は宇迦御魂とも呼ばれ、食の神様として全国にお稲荷さんとして祀られている神様です。

(※五男の磐坂彦尊の素性や功績はよくわかりません)

出雲神社御本殿

先に、出雲大社の現在の御祭神は大國主尊と紹介しましたが、本当は素戔嗚尊だという伝承もあるのですが、どうなんでしょうね。(実際に素戔嗚尊を祀った時期もあるようですが・・・。)

いずれにしても、現在は大國主尊をお祀りする出雲神社が、全国各地に存在しています。

そして、神話では大きく扱われ、出雲大社という大きな社にお祀りされている偉大な大國主尊ですが、短命(55 歳くらいか?)だったせいか、実際に大きな功績がなかった

せいか、義兄神やお子神様には立派な諡号があるにもかかわらず、この方は広大な国を統治したという意味の大國主尊という尊称のみです。

これだけでも大きな功績ではありますが・・・。

ところで、神社参拝の例として、拝礼と拍手がありますね。

今日では全国の多くの神社で「二礼二拍手一礼（二拝二拍手一拝）」でお参りされていますが、出雲大社系の神社では例外もありますが、「二拝四拍手一拝」でお参りします。

まず一回目の拝礼の後、お祈りしてもう一度拝礼します。次いで四拍手したのち最後に一拝です。

「礼」は、上体を軽く曲げる礼ですが、「拝」というのは、腰を深く折りまげて首を垂れるというものです。

ちなみに、神社の参拝の際の拍手のルーツは、三世紀に編纂された魏志倭人伝の記録に、日本人の風習として、「尊い方の前ではひざまずいて、柏手を打つ」という意味の記述あり、これがもととなっているようです。

四拍手を打ってお参りする神社は、他では大分県の宇佐八幡宮や新潟県の弥彦神社などもあるそうです。

ただ、二拍手と四拍手の違いの理由はよく判りません。

【八幡さん（八幡神社）】

（会報 第130号 令和２年７月発行）

日本国内でおおよそ数の多い神社といえば、まず「八幡神社（はちまんじんじゃ）」の右に出る神社はないでしょう。八幡様を主祭神として祀られたものは、なんとその数7,800社以上と言われています。

舞鶴市内でも、神社数171社（京都府神社庁発行の舞鶴の神社紹介一覧による）のうち、八幡神社は19社を数えます。

今回、舞鶴市内の八幡神社の代表として、東地区「市場」に鎮座される「八幡神社」を取り上げてみたいと思います。

図は「地理院地図(GSI Maps)」から編集

この神社は、国道２７号線を、福井方面から舞鶴市街地に入った、「市場交差点」のすぐ南側にあります。

市場交差点の信号からが参道になっており、国道脇に一対の狛犬と神社名の石碑が建っています。

そこから3～40メートル入ると石造りの一の鳥居、さらに小路を挟んで進むと数段の石段、そしてさらに石段を数段上ると木製朱塗りの二の鳥居に至ります。鳥居は２つとも明神型（笠木が上方に反った形）です。

二の鳥居の手前を、ＪＲ小浜線が走っていることは大変面白いことです。

八幡神社入口

八幡神社の鳥居

二の鳥居からさらに石段を上りますと、まず並立したいくつもの境内社が目に入ります。大小の違いはありますが、いずれも銅板葺きのしっかりした祠に祀られており、大変きれいに管理されていました。

神社境内のＪＲの線路は、文献によれば大正 13 年の敦鶴線（現小浜線）工事の際に買収されたとのことです。

境内社は、まず右手に天照大神（あまてらすおおかみ）をお祀りした祠、次に天照大神、兵主（ひょうず）、愛宕（あたご）、大川、稲荷の５神を合祀した祠、そして大川神社を独自にお祀りした祠が、いずれも東向きに並び、さらに稲荷、疫神（えきがみ）、北野、箭取（やとり）、松尾、乙姫をお祀りした５つの独立した祠が北に向かって並び、その左に 11 匹の狐（焼き物、稲荷神の守護）を並べた祠となっております。

境内社に、同じ神様がだぶって祀ってあるのも少し変な気がしないでもありませんでしたが、それはそれとしてその境内社群から、もう一つ石段を上った高い位置に、拝殿（あるいは神楽殿か？）があって、さらにその上方にご本殿がいずれも東向きに建てられています。

ご本殿

ご本殿は流造（ながれづくり）様式の美しい建物で、覆屋はなく、銅板葺きの素晴らしくきれいなお社で、拝殿とともによく管理されています。

周囲には、杉の古木を中心とした大きな木が茂って、神社の厳かさを醸し出しています。

参道入り口の石柱には「八幡大神社」と彫刻されており、また一の鳥居には、「八幡神社」「市姫（いちひめ）神社」と神名が並んで記された掲額があります。

鳥居の掲額の神名は明治32年、三位油小路隆薫氏の寄進とありました。

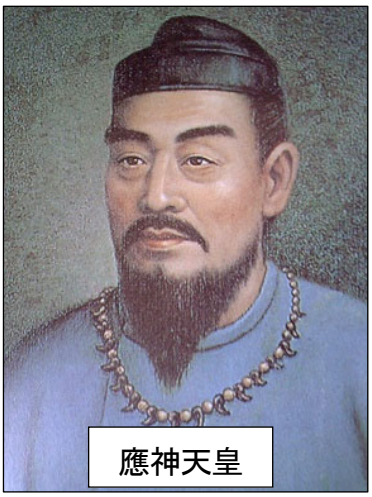
由緒によれば、もともとは広島の厳島神社から「市杵嶋姫」を勧請し、北海海上鎮護のために創建され、「海鎮明神」と称されていたが、その後市杵嶋姫の御神託により、宇佐八幡の祭神を合祀し、八幡神社となったということのようです。

八幡様ですから、日本の三大八幡宮、大分の宇佐神宮、京都の石清水八幡宮、福岡の筥崎八幡宮（鎌倉の鶴岡八幡宮）、の御祭神と同一の神様です。

ちなみに、日本の三大八幡宮に数えるのに、３番目は福岡の筥崎宮か鎌倉の鶴岡八幡宮かのいずれかといわれますが、神社名としては鶴岡八幡宮が有名かもしれませんが、筥崎宮のほうが旧官幣大社で、官幣中社であった鶴岡八幡宮よりも格が上ということになります。

ただ、どちらを挙げても間違いではなさそうです。

さて、八幡宮の神様、八幡様は、應神天皇と同一神とされており、弓箭（矢）をとる武人の神様ということになっています。私の故郷、島根の石見地方を中心とした、各地の集落に伝わる石見神楽のなかに、この神様が弓矢をもって悪魔（疫病神）を退治する「八幡」という演目があって、神様の口上に「自らは、豊前の国宇佐の宮に現れたるたる八幡麻呂という神なり。」というのがあります。


應神天皇

應神天皇は、第 15 代の天皇で、諡号を「誉田別天皇」とも称され、足仲彦天皇（第14代の仲哀天皇）と気長足姫尊（神功皇后）のお子さまです。神功皇后が、新羅に遠征され、これを平定して帰国後、誉田別尊を出産されました。そして誉田別尊の天皇即位を妨害する勢力を打ち破り大和に帰還され、誉田別尊は第15代應神天皇として即位されたのです。

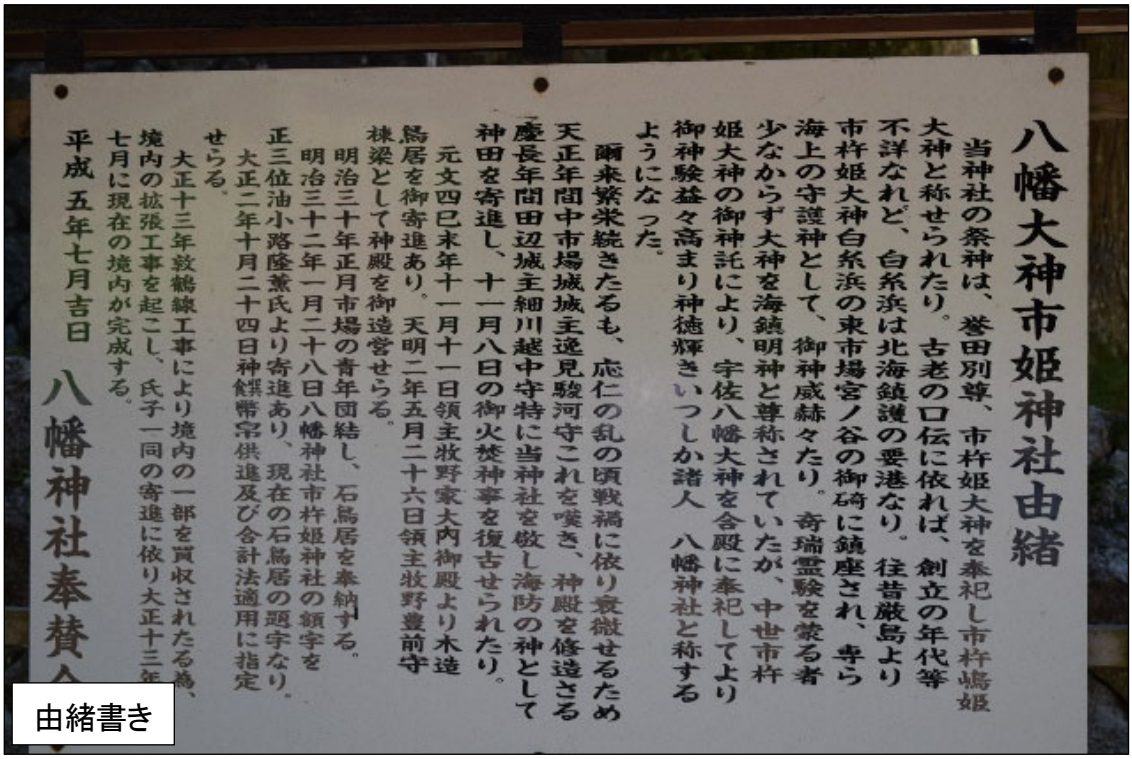
應神天皇は、武の神様で八幡様と呼ばれますが、以上のことは古事記の話。

ところで、八幡大菩薩という称号を御存じの読者は大勢おられると思います。

そうです、菩薩というのは仏様の一形態で、神道である八幡さんとはもともと異なるものでありますが、仏教を大切にされた聖武天皇（８世紀）の御代、神仏習合により八幡宮と結びついたもので、戦国の武将たちの、戦勝祈願の対象とされてきました。明治になって廃仏毀釈の政策により、現在は全国の八幡神社として、仏教を離れた神様（神道）として祀られています。

この八幡神社に合祀されている市姫様は、大日霊女貴尊（おおひるめむちのみこと）の第５子、「市杵嶋姫尊（いちきしまひめのみこと）（別名狭依姫尊（さよりひめみこと））」のことです。

この方は、広島の宮島（厳島神社）の神様で、福岡の宗像神社にお祀りされておられることでも有名な神様ですね。



由緒書き

ちなみに福岡では、沖ノ島（沖津宮）の多起理姫尊、大島（中津宮）の多岐津姫尊、そして九州本土（辺津宮）の市杵嶋姫尊は、宗像三３女神とよばれ海上鎮護の神様であります。

３女神は、大分の宇佐八幡宮に、八幡様と並んで祀られるなど、多くの神社に海上安全の神様として祀られている有名な神々です。

朝鮮半島との往来が盛んであったころ、このあたりの海域は、重要な海路でもあり、また玄海灘と呼ばれる海上交通の難所でもあったことから、海の守り神として祀られたものでしょう。

舞鶴の八幡さんの境内社を簡単に紹介させていただきます。

「天照皇大神」は、言わずと知れた伊勢の神様大日霊女貴尊です。

「大川神社」は舞鶴市内の由良川沿いにある保食の神で、五穀豊穣、養蚕の神様。

境内社（天照大神）

「稲荷神社」は宇迦魂（倉稲魂とも呼ばれる）のことで、豊穣の神様（狐ではありません）。この方は素戔嗚尊の６番目のお子神です。

境内社（稲荷）

「兵主神社」は、大穴貴尊、少彦名尊、天香山尊、恵比寿様を祀った神社で兵庫県丹波市のものが有名です。

「愛宕神社」は、火の神様（鎮火の神様）。

「疫神」は病気をはやらす神様ですが、境内社に祀るということは、厄除けの意味があるのかもしれません。

ただ、八幡さんは前述のごとく、外来の疫病神を退治された神様ですから、あるいはその疫病神を追悼する意味なのかもしれません。筆者も初めて目にする神で、詳細はよくわからないです。

「北野神社」は、ご存じの北野天満宮（菅原道真公をお祀りする神社）。

「箭取（やとり）神社」は、滋賀県建部神社に代表されるもので、倭武尊（やまとたけるみこと）を祀る神社。武門武将崇拝が篤い神社です。

「松尾大社は」、京都嵐山の神社で大山咋尊（おおやまくいのみこと）（饒速日尊（にぎはやひのみこと）と比定）を祭神とする神社。

「乙姫神社」は、宮崎県日南市の神社で、初代神武天皇のお妃だった吾平津姫（あびらつひめ）を祀る神社。

ちなみに、初代神武天皇は日向では伊波礼彦尊（いわれひこのみこと）と呼ばれていました。大和の大王饒速日尊の末子伊須気依姫（いすけよりひめ）との縁組（大和と出雲九州の統一）が決まり、吾平津姫を娘の豊受姫（とようけひめ）とともに日南に残して大和入りされ、初代天皇として即位されたということです。

※本稿中「應神天皇」の肖像画は、「Ｙａｈｏｏ『応神天皇肖像画』」一覧の中から引用させていただきました。

【奈良「山の辺の道」の三大神社】

（会報 第131号 令和３年１月発行）

奈良は、周囲を小高い山に囲まれた大変規模の大きな盆地となっています。

その奈良の東に連なる山裾沿いに、天理市から桜井市を経て奈良市につながる日本最古の道といわれる「山の辺の道」があります。

※案内図は、奈良県のウォーキングポータルサイト!!～ (pref.nara.jp)を参照

古事記・日本書紀や万葉集にもゆかりの地名が多いこの古道は、数多くの史跡や伝説が残る、古代歴史ロマンをたどる道として現在も親しまれています。

私は、残念ながら「山の辺の道」そのものは歩いたことがないのですが、数年前この道に沿った国道をとおり十分な雰囲気を味わったことがあります。

（この国道169号線は、ほぼ「山の辺の道」に沿っています。）

今回は、この「山の辺の道」沿いの神様について触れてみたいと思います。

あえてこの奈良の古道を紹介しようとする意図は、もちろん神様に係わる話だからです。以前この稿「大和神祖の謎」※という話の中で、饒速日尊（にぎはやひのみこと）という神様を紹介しましたが、その中の内容と重なる部分もありますのでお断りしておきます。

※「大和神祖の謎」は、会報第93号(平成20年4月)又は当協会ホームページ参照
「舞鶴市の神様たち1/2」https://nikkaikb.com/files/libs/331/201912241113253434.pdf

この「山の辺の道」沿いには、古事記・日本書紀（二つをあわせて「記・紀」といわれています）が編纂される以前からの古い神社が数多く存在しますが、その中で「奈良三大神社」ともいわれている、もっとも由緒ある三つの神社について紹介したいと思います。

さて、まず第一に紹介する神社は、わが国で最も古い神社の一つといわれる「大神(おおみわ)神社」です。鎮座される場所は奈良県桜井市三輪で、JR 桜井線の三輪駅から歩いて５分。車でアクセスする場合は、西名阪自動車道路の天理インターチェンジを降り、国道 169 号線を南に 15 キロメートルほどいった場所です。巨大な鳥居が聳え立っているのですぐにわかります。

国道 169 号線からは、三輪参道入り口から大鳥居をくぐって 600 メートルほど行くと、こんもりと茂った森の中に参道が見えてきます。

（もちろん参道には車は入れません。）

参道を 200 メートルばかり歩くと、神社の御拝殿に到着します。

大変大きくきれいな御拝殿です。

大神神社のご説明によれば、御拝殿の奥（東側）にあたる三輪山に御祭神が鎮まる、つまりお山が御本殿という古い形の神社形式で、わが国のもっとも古い神社ということです。

御拝殿と三輪山との間には「三つ鳥居」という珍しい形の鳥居があるとのことですが、私は御拝殿から奥には立ち入ることができませんでした。

資料によると、なんでも明神型（笠木の両端が上方に反っている形）の鳥居を横に三つ連ねた形の鳥居ということです。

大神神社の主祭神は「大物主大神(おおものぬしのおおかみ)」で、三輪山の磐座(いわくら)に祀られておられ、第十代崇神天皇が、大田田根子(おおたたねこ)に命じて祀ったのが始まりとされています。

次に訪れた神社は、天理市にある大和神社（おおやまとじんじゃ）です。

大和神社鳥居

大和神社は、大神神社から北へ５キロメートルほどいったところに位置しており、国道 169 号線の「大和神社前」交差点から西へ折れ、200 メートルほどいくと、一の鳥居があります。（脇に駐車場がある）

なお、ここには「大和神社」の看板も立っています。

ここから道の両脇に木々が立ち並ぶ参道をさらに 300 メートルほどいくと神社に行き着きます。神社は、御拝殿とその奥に御本殿という並びになっていて、御本殿は３つの社からなり、中央に主祭神日本大國魂大神（やまとおおくにたまのおおかみ）、両脇に八千矛大神（やちほこのおおかみ）・御歳大神（みとしのおおかみ）がそれぞれ祀られています。

神社の由緒によると第十代崇神天皇がそれまで宮中で祀られていた神々を、皇女に命じて、この地に遷宮されたということのようです。

同神社の記録に創始の経緯について、「三座の神々は、上古、大和朝廷の守護神として宮中に祀られ給いしが、人皇十代崇神天皇は、いたく御神威を畏み給い、同六年、天照大神を笠縫邑に、当社の神々を市磯邑に遷宮あそばされ、皇女淳名城入姫尊（ぬなきいりひめのみこと）を斎主（いつきぬし）として親しく祀らしめ給う」と書かれています。

大和神社拝殿

三大神社のうち最後に訪れたのは、やはり天理市にある石上神社（いそのかみじんじゃ）でした。

大和神社から国道 169 号線を北へ、そして 169 号線をはなれ道を東へ行くと石上神社に行き着きます。

石上神社の鳥居

大和神社からは５キロメートルほどの距離になります。

神社は布留(ふる)町というところにあり、神社境内の北側には布留川が流れています。

神社の由来では、初代神武天皇の時代は皇居の内で祀られていたご祭神を、第十代崇神天皇が、時の宰相の伊香色雄尊(いかしこおのみこと)（物部の祖）に命じ、現地石上布留の高庭に祀らせたというのがこの神社の創始ということです。

その御祭神とは、布都御魂大神(ふつのみたまのおおかみ)、布都斯御魂大神(ふつしみたまのおおかみ)、布留御魂大神(ふるのみたまのおおかみ)、宇摩志麻治尊(うましまちのみこと)４柱です。この神々は直系四代の神々です。

（なお、ほかに三柱の神々が祀られていますが、この方達はのちに合祀されたものと思われます。）

「布留高庭」といい、「布留川」という川の名、「布留町」という地名などからして、この４柱の中で中心となられる神様は「布留御魂大神」と思われます。

ここまで三大神社について、鎮座の場所、創始の経緯やご祭神などについて、紹介してきましたが、これらはいずれも第十代崇神天皇が、天災地変による飢餓や疫病の大流行などを鎮めるため、皇居内に祀られていた神々を、それぞれの地に遷宮創始されたということになっています。

石上神社本殿

以上三つの神社が奈良の三大神社ということです。

ところで、それぞれの神社の主祭神ともいえる、大神神社の「大物主大神」、大和神社の「日本大國魂大神」、そして石上神社の「布留御魂大神」の正体はどういう方なのでしょうか？

このことについて、歴史学者原田常次氏はその著「古代日本正史」において、古代に創始された神社の詳細な研究をもとに、明らかにされています。

饒速日尊像

そうした調査研究の結果、このお三方は、いずれも初代神武天皇ご即位（西暦 240 年ごろか）以前に大和（奈良）を支配されていた饒速日尊ということをつきとめられました。

それでは饒速日尊とはどんな方だったのでしょう。

実は、諡号（しごう）（おくりな）を「天照国照日子天火明奇甕玉饒速日尊（あまてらすくにてらすひこあめのほあかりくしみかたまにぎはやひのみこと）」と申される大変偉大な神様でした。

この方は、152 年前後に出雲の英雄素戔嗚尊の第五子として出雲でお生まれになり、素戔嗚尊とともに出雲・九州地方の統一をされ、その後 180 年ごろ素戔嗚尊の命により、大王（おおきみ）の印天璽十種瑞宝（あまつしるしとぐさのかんだから）を授けられ、三輪山の麓で大王になられたという方なのです。

我が国の古代の歴史については、古事記・日本書紀の記述がもっとも権威ある歴史書として扱われ、これらの記述の内容をもとに上古日本の国の生い立ちが論じられています。

そして、各地の遺跡の発掘や発見された出土品などと照合するなどして真実に迫ろうという研究がされています。

ところが、記・紀の記述の中には、饒速日尊については偉大な神様であるにも関わらず、きわめて記述が少ないのみならず非常に影が薄い。

さらに、記・紀編纂以前の古社は、出雲系の神様を祀ったものが圧倒的に多数（一説には全神社の 80%とも・・・）であるのにも関わらず、主祭神は神話（いうなればおとぎ話のような・・・）という実体とはまるでかけ離れた内容で語られています。

私が、我が国の古代の出来事に興味をもったきっかけは、島根県石見地方に伝わる「石見神楽」ですが、神楽のストーリーは記・紀（なかでも特に古事記）の神話が中心です。

記・紀が日本の歴史書といわれても、神代の部分に関する限りはとても史実とは言い難い内容です。（もっとも記・紀の神話の部分もすべて作り話ということはできませんが・・・。）

ところが原田常次氏の著「古代日本正史」は、記・紀編纂時期より以前に創建された神社の調査研究をもとに古代史の謎に迫ったものになっています。

大変納得させられる論文です。

原田氏が、「倭大物主櫛甕玉尊」「彦天火明尊」など神名を手掛かりに、日本各地の神社を調査された結果、奈良三大神社の主祭神は「天照国照日子天火明奇甕玉饒速日尊」であると、結論されました。

記・紀では、これら偉大な神々の実体をなるべく隠したい何か理由があったのではないかと思われます。

実は「山の辺の道」に沿っては、ほかにも大変たくさんの神社や天皇陵、遺跡など、上古の重要な文化財がたくさん存在します。

特に大神神社には、数多くの摂社があって、それぞれ名だたる神々が祀られておられます。また、石上神社には「十束の剣」や「七支の剣」等の国宝もあります。一度ゆっくり訪ねてごらんになってはいかがでしょうか。

注　今回の投稿にあたっては、原田常治氏著「記・紀以前の資料による古代日本正史」の論文を参考にさせていただいています。

また、饒速日尊の画像は、唐松神社（秋田県大仙市）に伝わる画像を転写させていただきました。

【舞鶴の神様たち（貴布祢神社）】

（会報 第132号 令和３年４月発行）

貴布祢神社（貴船神社も同じ）の総本山は、京都の鞍馬にあり創建は八世紀ごろと考えられておりまして、ここから勧請された神社は全国に四百五十社ほどあるそうです。また、こちらのご祭神高 靈（たかおかみのかみ） 神 を祀る神社は二千社以上あるといわれていますので、読者の皆様の近くにも関連の神社はあるのではないでしょうか。

これらの神社は、古くから祈雨、祈晴の神として朝廷から崇敬され、水の神として農業、醸造、染織、料理飲食、浴場などの業種の関係者の信仰を集めています。

舞鶴市にも貴布祢神社がありますので、今回はこの神社を取り上げてみたいと思います。この神社は、由緒書きによると永禄年間（14世紀中葉）京都の貴布祢神社から勧請したということです。

稲荷山

神社由来案内板

舞鶴若狭自動車道の東舞鶴インターを出て東舞鶴方面に向かい、「祖母谷口交差点」を右折してほぼ500メートルの突き当りに位置しています。入り口には神社名を彫り込んだ石柱が建っており、稲荷山南西の麓の高座に坐し、神社前には、貴船公園という広場もあって、その奥が神社境内となっています。

本地図は「地理院地図(GSI Maps)」から編集本地

参道には第一、第二と２基の石造り明神型鳥居が並び、御神殿に達する参道途中には境内社が並立しています。

貴布祢神社鳥居

ご本殿真

境内社六社

境内は、もちろん最上部がご本殿、その一段下に拝殿（あるいは舞殿か？）という２段構えであります。

ご本殿は、覆屋で保護された木造柿葺（こけらぶき）の立派なお社で、また拝殿は、とっても開放的な造りになっております。覆屋、拝殿ともに近年改築されたと思われ、古さは感じられませんでした。

境内の下の方には、右手にまず手水舎のほか、涸れることのない清水が湧くという石の手水鉢（不涸の清水）が置いてあります。

そしてご本殿に至る参道の並びには境内社である、「稲荷」、「天神」、「豊川」、「疫（えき）」、「大川」、「浦島」、「當勝（まさかつ）」の六社が配置され、また拝殿の右脇

に、他のものとは少し大きな境内社「稲荷神社」が祀られています。お稲荷さん特有の赤い鳥居も立っていました。

境内社「稲荷神社」は由緒書き看板によると、「貴布祢神社創建の折背後の稲荷山から遷された。」とありました。

狛犬

さらに拝殿前左右に、優しい顔つきで巻毛風の髭の狛犬が一対置かれていますが、大変丁寧な作りの狛犬で、あまり他では見かけない形のものでした。

それぞれ六つの境内社の神様は、「天神」は福岡大宰府天満宮の菅原道真公、「豊川」は愛知県の豊川稲荷（実は曹洞宗のお寺で手筒花火が有名なお寺）、「疫神社」は文字通り疫病の神様（京都八坂神社の摂社）、「大川」は舞鶴市内の大川神社で保食（うけもち）（人が生きるための糧を司る）の神様、「浦島」は京都府伊根町の浦嶋神社(漁業、航海の神の筒川大明神である浦嶋子（うらしまこ）を祀る)、「當勝」は兵庫県朝来市の開運繁栄の神様で、天照皇大神（あまてらすおおみかみ）（大日霊女貴尊（おおひるめむちのみこと））のご長男である天忍穂耳尊（あめのおしおみみのみこと）を祀るというものです。

話は少し外れますが、現在の天神様は、学業の神様として菅原道真公をお祀りしていますが昔は、高天原の神々（天神）を指していたもので、その代表は高皇産霊神（たかみむすびのかみ）（大日霊女貴のブレーン）のことだったという話もあります。

拝殿

また「豊川稲荷」は、愛知県豊川市にあるお稲荷様で、実際は曹洞宗のお寺であります。もちろん寺院内にお稲荷さんが祀ってあるとは思いますが。「疫」神社は文字通り疫病の神様で京都八坂神社の摂社として祀られていて、「夏越（なごし）の祓（はらえ）」

の茅輪くぐりで有名ですね。（なお、夏越の祓の神事はあちらこちらの神社でも行われています。）

「浦島」神社は、大日霊女貴の御子神日子火々出見尊（日向神話浦嶋太郎でおなじみの山幸彦）を祀る神社です。

さて、この舞鶴の貴布祢神社は、冒頭の部分でも触れましたように永禄年間（14 世紀中葉）京都の貴布祢神社から勧請したということですので、主祭神は本山の主祭神と同じ、水の神様高龗神であります。

境内に、不涸の清水や手洗水が大切に管理されているのもうなずけます。

境内社稲荷神社

それでは高龗神様とはどのような神様でしょうか。

古事記・日本書紀の神話に、伊弉諾尊と伊弉冉尊による神産みの話がありますが、そのなかで伊弉冉尊は最後に**迦具土神**をお産みになりました。**迦具土神**はいわゆる火の神様ですね。

その折伊弉冉尊は大火傷をされ、それが元でお亡くなりになります。

激怒された伊弉諾尊は**迦具土神**を剣で成敗されましたが、その時**迦具土神**のご遺体（頸部からの出血液）の中からお生まれになったのが「淤加美神」つまり龗神という話になっています。

古代、火は生活に欠かせない大切なものとされましたが、一方で大変危険なものでもありました。他方で水もまた生きるために大切なものであるのみならず、火を抑制する力を持っています。

また農耕弥生民族にとっても農耕に欠かせません。

そういったところから、龗神様は必然的に現れ崇められてきた抽象的な神様と思われます。

この神様は「高 龗 神（たかおかみのかみ）」と「闇 龗 神（くらおかみのかみ）」という区別で二神がありますが、山の水あるいは川の水の対比で呼び別けされているもので、実は同一神であると思われます。

参考のため記・紀神話の龗神がお生まれになった部分を抜粋したものを掲載します。

＜古事記の「別天神五柱から神世七代」から抜粋＞

（前略）

故、伊邪那美神者、**因生火神**、遂神避坐也。

（中略）

於是伊邪那岐命、拔所御佩之十拳劒、**斬其子迦具土神之頸**。爾著其御刀前之血、走就湯津石村、所成神名、石拆神、次根拆神、次石筒之男神。次著御刀本血亦、走就湯津石村、所成神名、甕速日神、次樋速日神、次建御雷之男神、亦名建布都神、亦名豐布都神。次**集御刀之手上血、自手俣漏出、所成神名、闇淤加美神**、次闇御津羽神。

＜日本書紀の「巻第一神代上」から抜粋＞

（前略）

至於**火神軻遇突智之生**也、其母**伊弉冉尊、見焦而化去**。

于時、伊弉諾尊恨之曰「唯以一兒、替我愛之妹者乎。」則匍匐頭邊、匍匐脚邊而哭泣流涕焉、其涙墮而爲神、是卽畝丘樹下所居之神、號啼澤女命矣。**遂拔所帶十握劒、斬軻遇突智爲三段、此各化成神也**。復劒刃垂血、是爲天安河邊所在五百箇磐石也、卽此經津主神之祖矣。復劒鐔垂血、激越爲神、號曰甕速日神、次熯速日神、其甕速日神是武甕槌神之祖也、亦曰甕速日命、次熯速日命、次武甕槌神。復劒鋒垂血、激越爲神、號曰磐裂神、次根裂神、次磐筒男命、一云磐筒男命及磐筒女命。**復劒頭垂血、**激越爲神、**號曰闇龗、**次闇山祇、次闇罔象

古事記では、このように伊弉冉尊の亡くなられた原因が火傷であること、伊弉諾尊が迦具土神の頸部を剣で斬って成敗したこと、その時に手指の俣の流血から闇淤加美神（くらおかみのかみ）（龗神）がお生まれになったとことが書かれています。

また、日本書紀にも古事記同様、伊弉冉尊死因と迦具土神を成敗された時に剣（あるいは指の間）から垂れた流血の中から闇龗神がお生まれになったことが書かれています。

・・・と、まあ、これは、記・紀の中の神話の話。古代に実在した神様（人物）の中に比定される方はいらっしゃいません。

それでは元々貴布祢神社の祭神には、実在した人物に比定されるどなたかがいらっしゃらないのかというと、実はこれは私の私見ではありますが、饒速日尊が祀られているのではないかと考えています。

そう考えるのは、江戸時代までは賀茂別雷尊（饒速日尊）を祭神としていたこと。（明治以降になってようやく靈神を祀る独立の神社となった。）

「貴船」とも表記されるが饒速日尊は天磐船に乗って河内磯ケ峰（現東大阪市）に降臨されたということ。

奥宮に「大山昨尊（饒速日尊）」が祀られていること。

などからです。

【舞鶴の神様たち（金峰神社）】

（会報 第133号 令和３年７月発行）

以前この稿で、日原（ひばら）神社を紹介（会報第104号平成23年12月発行）したことがありますが、そのおり舞鶴市内の「女布（にょう）」という地名の集落について簡単に触れました。女布は、舞鶴若狭道・舞鶴西ICから国道27号を北に2.7キロメートルの「城南中学校前」を左折し、南西寄りに、約１キロメートルほど入いったところです。

縄文時代の集落跡があり、舞鶴は遠い昔この女布から始まった、との言い伝えさえあるところで、現在も、立派な旧家が立ち並んでいて、由緒のある地区だということが容易に想像できる集落です。

本地図は「地理院地図(GSI Maps)」から編集

この女布地区の奥まった山中に、今回紹介する「金峰（きんぽう）神社」が鎮座されています。

以前、日原（ひばら）神社を紹介したおりに金峰神社のことにもちょっと触れたことを思い出しました。

女布の集落の最奥まで狭い砂利道を行くと、金峰神社の一の鳥居の側面に行き着きますが、車はここまでです。十分な駐車スペースがあります。

一の鳥居の掲額

神社へのアプローチは、南向きに建てられた石造りの一の鳥居をくぐって、急な坂道を300メートルほど登っていきます。胸突き八丁の急坂道で息が切れてしまいますよ。参道の上り始めの高手に「白山姫神社（しらやまひめじんじゃ）」という真新しい

小社が、参拝者を迎えています。

なお、一の鳥居には「金峰神社」と彫り込まれた木製のきれいな掲額が掛けてありました。

参道は、鉄製の手すりが道に沿って設置されてありますので、それに掴まりながら、休み休み登っていきますと、15 分ほどで神社の境内に着きました。

本殿前には、「金峰神社」と彫られた石柱が建っていて、大正四年十一月に奉納されたことを示す刻字がありました。

神社名石碑

続いて、木造の二の鳥居が建っています。二の鳥居は赤く塗られたこじんまりした鳥居で、笠木は腐食が進んでいるようでした。拝殿とか神楽殿と思われる建造物はなく（社務所？あるいはこれが拝殿かも？と思わる建物はある）、二の鳥居からは、直接ご本殿に至る配置となっていました。社務所と思われる建物の脇に、七神を祀る境内社が配置されていたがご祭神の詳細はわかりませんでした。

ご本殿は、舞鶴市内の多くの神社に見られるように、風雨からご本殿を護る覆屋に囲われていましたが、覆屋の側壁は縦格子目の粗い板壁になっていて、中の立派な造りの神殿が周りからものぞき見することができました。

ご本殿覆屋

ご祭神は、地の人に聞いたところ、「天王さんと呼ばれている。」とのことでした。

天王さんとは、牛頭（ごず）天王のことですから、素戔嗚尊（すさのおのみこと）がご祭神と思われます。

直線距離で300メートルほど北隣りにある日原神社のご祭神が、大日霊女貴尊（私の私見的解釈）なので、お二人は、二世紀の初め（170 年ごろ）、日向で一緒にお住まいになっておられた時期があり、お二人の間に宗像３女神、つまり多紀理姫・多岐津姫・狭依理姫がお生まれになったということからしても、二神社が隣接して祀られていても、全然不思議ではありません。むしろ自然なことだと思われるほどです。

ご本殿

奈良県桜井市の大神神社の脇宮には檜原神社という神社が、また、島根県の雲南市に日原神社があります（島根県に他にも同じ名前の神社がたくさんあります。）が、やはりご祭神は大日霊女貴尊です。

素戔嗚尊については、これまでの稿で数多く触れてきましたので、今回は説明を省略させてもらいます。

ご本殿屋根裏

金峰神社は、天平年間（729-748 年）、高僧行基上人が日本国内を巡歴されたとき、この地を訪れ、山麓に金峰山菩提寺を建立された（確かな史料は存在しない）とされ、その鎮守社として素戔嗚尊を勧請して建立されたとのことです。

ちなみに行基上人は、資料によれば、主に大阪を中心に、50 ケ寺近くを建立されたと伝えられていますが、残念ながら、女布の金峰神社はこの資料の中にはありません。この話は、神社には関係がありませんので詳細は省略します。

神社の参道途中に祀られている「白山姫神社」は、金峰神社の脇宮で、「白山比咩神社」とも書き表されています。石川県にある加賀一之宮がその本山で、菊理媛神をご祭神とする神社ですが、菊理媛神は伊弉諾、伊弉冉両神様と関係の深い神様なので、金峰神社には、素戔嗚尊のほかに伊弉諾・伊弉冉尊が合祀されているのかもしれませんが、詳細はわかりませんでした。

脇宮「白山姫神社」

また、白山姫神社がどういった経緯でこちらの境内社として祀られているのかもわかりませんでした。

いずれにしても、これまで訪れた舞鶴市内の神社では見たことのない珍しい神様です。

ちなみに、この神社の一の鳥居のそばに、舞鶴市内で最大といわれるモミの巨木があります。

モミの巨木

胸高の周囲が５メートル、樹高は何と 45 メートルといいます。モミの頂上を見ても落雷などによる損壊もなく、推定樹齢 300 年以上といわれているそうです。これからも無事大きくなってほしいものです。

写真では巨木には見えませんが、実際には大変大きなものですよ。

【舞鶴の神様たち（春日神社）】

（会報 第134号 令和４年１月発行）

舞鶴市の西端、宮津市とのほぼ境界に近いところに「滝ケ宇呂」という集落があります。あるテレビ局の番組「ぽつんと一軒家」がロケ取材しそうな集落で、どの家も一軒家といっていいような５、６軒の民家が点在するところです。

そんな集落にある、「春日神社」を今回は尋ねました。

場所は、舞鶴市から国道175号線を福知山市に向かい、「地頭」の三叉路交差点信号を右折し、５キロメートルほど山間の道を北に行ったところですが、途中からはまったくの山道で交通量もほとんどないという道を上っていきますと、その道の突き当りの場所に鎮座されている春日神社に到着します。神社すぐ近くには、ホルスタインの牛舎と一軒の民家があるのみで、そのほかには民家はありません。失礼ながら、「こんなところに集落があるなんて？」といったようなところです。

本地図は「地理院地図(GSI Maps)」から編集

春日神社のすぐそばの、その民家を訪ねてみたところ、田村政巳さんとおっしゃる方のお家で、「自分は平安時代の坂上田村麻呂（さかのうえのたむらまろ）の末裔で、数えて43代目に当たる子孫。戦国の終わりごろ（16世紀末か？）、舞鶴の田辺藩を頼って九州から落ちてきて、田辺藩からこのあたりの土地をもらって住み始めた。それから13代目を数え、自分も家名としては田村太郎左衛門政巳と名乗っている」とのことでした。

春日神社の鳥居

ちなみに、現在は、ホルスタイン種の乳牛を十数頭飼育し、糞尿はおがくずと混ぜて発酵した肥料を製造しておられるとのことで、自宅近くに牛舎と「平成 11 年環境保全型畜産確立対策事業」と表記されたサイロがあり、私が訪問した 11 月 6 日は、稼働中の装置が音を立て、蒸気のような煙が輩出された状態でした。

さて、春日神社ですが、道の突き当りの場所の神社の入り口に、昭和８年建立の石灯籠が建っていて、石灯籠から 10 メートルほどのところの６段の石段を上ると石造りの明神型鳥居があります。

ご本殿

鳥居には「明治四二年七月吉祥日建立」の刻印が判別できました。さらに 20 メートルほど参道を上り 12 段の石段を上がると一対の石灯籠があって、その奥のご本殿に達します。

ご本殿は覆い屋根に覆われてはいるものの、前側と両側面が完全に、覆われる構造ではないため、風雨にさらされ、失礼ながら痛みがかなりひどいという状態になっています。

とは言え、この春日神社は、京都府神社庁の舞鶴市神社一覧にも載っておりご本殿は、あまり大きくはありませんが、木造流れ造りの立派なお社です。

ご本殿

もう少し手を入れたほうがいいのでは、と残念な思いはありました。

ご本殿両脇には唐獅子一対、そして左右に境内社がそれぞれひとつずつありました。

ご本殿、境内社とも手掛かりになる木札などは見当たらず、残念ながらどなたがお祀りしてあるのかはわかりません。

境内唐獅子

春日神社といえば奈良の「春日大社」を総本社とする全国に 1000 社以上存在するといわれる神社が頭に浮かびます。

春日神社の多くの御祭神は、日向の軍神「武甕槌命（たけみかづちのみこと）」、「経津主命（ふつぬしのみこと）」、「天児屋根命（あめのこやねのみこと）」のいずれか、あるいはこのお三方が祀られておられるのではと頭に浮かぶのですが、田村さんに尋ねたところ、なんとこの神社の御祭神は田村家の祖（おや）神様（がみさま）ということでした。ということは、坂上田村麻呂がお祀りされている（？）ということなのでしょうか？春日大社をはじめ全国の春日神社とのゆかりなどはまったくない。とのことでした。いずれにしても、戦国時代の終わりごろに、田村家のご先祖がこの地に入植されてから創建されたということですが、詳細はわかりませんでした。

境内には巨大な銀杏の木が２本あって、そのうち１本は胸高さの胴回り２メートル、もう一本は１メートル 80 センチほどの太さです。木の下付近には敷き詰めたほどの銀杏の実がいっぱいでした。

神社の裏側は、杉やヒノキの巨木が谷あいに沿って裏山の上に連なっており、いかにも神域という雰囲気が漂うという感じです。

境内大銀杏の木

ご本殿裏の檜・杉林

今回取材した春日神社は、春日大社をはじめとする全国の春日神社とのご縁はないということでしたが、せっかくですので春日神社にまつわる話を紹介しておきたいと思います。

前述した通り、春日神社の総本宮は、奈良の春日大社で、茨城県の鹿島神宮の御祭神「武甕槌命」、千葉県の香取神宮の御祭神「経津主命」、大阪の枚岡大社の「天児屋根命」のご三方が祭神です。

（ほかに一柱「比売御神（ひめみかみ）」が祀られていますが、天児屋根命の妻神あるいは宗像三神という説もあります。）

古事記の葦原中國（あしはらなかつくに）（神話にいう地上の世界）の平定の項で、武甕槌命は出雲の稲佐の浜に降り立ち、十束（とつか）の剣（つるぎ）（長い剣）を波の上に逆さまに突き立て、その切っ先の上に胡坐をかいて、大国主命（おおくにぬしのみこと）に対して国譲りの談判を行った。大国主命とお子神事代主命（ことしろぬしみこと）は、すんなりと承諾したが、もう一人のお子神武御名方命（たけみなかたのみこと）は反対して抵抗されたことが記されています。

この国譲りの話は、武甕槌命と経津主命が武御名方命を打ち破り、最終的には、長野県の諏訪に追込み降参させたことで決着をみたことになっています。

（武御名方命は諏訪大社の御祭神です。）

天児屋根命は天の岩戸神話で功あった神様で、天孫降臨や天岩戸などで功が記されている神様です。

春日大社は、藤原氏の守護神で日向（高天原）系の神様ですから、出雲系の神様にとって、優位な話はありません。

【舞鶴の神様たち（雨引神社）】

（会報 第 135 号 令和４年４月発行）

舞鶴市の南西、綾部市と接する所に「城屋（じょうや）」という地名の地区があります。以前の会報で日原神社（第 104 号）や金峰神社（第 133 号）で「女布（にょう）」という地区を紹介したことがありますが、城屋はその女布とともにこの地域のシンボルとなっている千石山の裾野に広がる比較的大きな集落で、上古舞鶴の発祥の地ともいわれております。

今回は、この城屋に鎮座される「雨引（あまびき）神社」を取り上げてみたいと思います。

雨引神社は、別に「天曳」または「天引」とも称され、水に関係のある神様を祀った神社です。

本地図は「地理院地図(GSI Maps)」から編集

国道 27 号線「引土（ひきつち）南交差点」を西側に折れ、府道 66 号線を南にとって高野川沿いを４キロメートルほど行った所にあり、その高野川に架かる橋と橋を渡った所にある鳥居が目印です。

神社の鳥居は、木造の明神型鳥居（笠木の両端が上方に反った形）で笠木には銅板葺きの屋根があり、額束（笠木の中央下の部材）に「正一位雨引宮」と白色浮彫の木製扁額が掲げてあります。

ちなみに、正一位というのは神社の社格を表したもので、正一位は最高の位ですから、雨引神社がどういう経緯で正一位に叙せられた（小さい神社は位が低いということはないですが・・・）のかは疑問ですが、いずれ正一位の社格の神社から勧請されてその位階を名乗るようになったのかもしれませんね。そういった例は結構あるそうですから・・・。

雨引神社鳥居と扁額

現代では神社の社格としては用いられていません。

鳥居をくぐり参道を進み、数段の石段を上がったところにご本殿があります。

トタン葺き屋根の木製の覆屋で囲われていて、中を拝見しますと、大変美しい彫刻が施された流造（ながれづくり）の立派なご本殿が鎮座されていました。

ご本殿覆屋

ご本殿

ご本殿の覆屋正面両脇には、一対の石燈篭と狛犬（唐獅子）があります。

そして、ご本殿に向かって右側に境内社を祀る瓦屋根の長屋が建てられていて、十一社の境内社が並立して祀られていました。

境内社の祠

境内社は、向かって右から若宮、正勝、稲荷、春日、神宮、八幡、大川、熊野、兵主（ひょうず）、金毘羅、多賀の十一社で、それぞれの祠ごとに神社名が書かれた木簡が掛けられていました。

神社境内には、ケヤキ、クスノキなどの巨木が立っており、神社の古い歴史を物語っています。

また、境内のご本殿に向かって左側には結構広い場所があり、京都府と舞鶴市の登録無形文化財となっている「城屋の揚松明（あげたいまつ）」（後述）の会場となっています。

雨引神社のご祭神は、「水分神（みくまりのかみ）」と申され、もともと雨乞いあるいは農耕水利を司る神として祀られたのが神社の始まりといわれていますが、一説にはこの雨引神社は、古い伝説が神社創立の起源として伝えられ、別名というのか本名というのか地元では「蛇神様（じゃがみ）」とも呼んでいるそうです。

水分神様は、水源地や水路の分岐地などに「天水分神（あめのみずわけのかみ）」として祀られる神様で、神話では、速秋津彦命（はやあきつひこのみこと）と速秋津比売命（はやあきつひめのみこと）のお子神（古事記の「神産」の段）として紹介されています。

神社名やご神体などから推測して、雨乞いの神様の方が正しいのではないかと私は思っています。

ちなみに、一説の古い伝説というのは、大蛇退治伝説のことで、退治された大蛇こそがこの神社の本来の祭神であろうというものです。

その大蛇退治伝説とは、森脇宗坡（もりわけのそうは）（巴）という武将の話です。

戦国時代（十六世紀中葉、）女布城主であった森脇宗坡（もりわけのそうは）（巴）は、隣村に嫁いだ娘が女布に里帰りする途中大蛇に食われ、その仇を討ったというもので、そのとき大蛇を三断にし、うち頭部が城屋の雨引の祭神となったという話なのですが、いかにも作り話という感じですよね。ただし、森脇宗坡は実在の人物だそうです。

大蛇退治伝説では、胴部は野村寺の中ノ森、尾部は高野由里の尾の森の各神社（いずれも城屋近傍）となったといわれています。

雨引神社から高野川を３キロメートルばかり遡った上流の日浦ケ谷に「雨引神社奥の院」があり、さらにその奥に伝説の「蛇が池」もあるというのでアプローチを試みましたが、今回は残念ながら残雪のため行くことができませんでした。

奥の院までは、府道 490 号線(物部西舞鶴線)が走っていて、その道を行けばよいとのことで、通常だとごく近くまで車が通行可能だが、奥の方は舗装もなくぬかるんで結構険しいということでした。その先は綾部市との境界となっているとのことです。

奥の院は、雨引神社の分社ということになっていますのでご祭神は、やはり水分神で、実は雨引神社の原型を成したものではないかとも考えられているとのことでした。詳細はわかりません。

こちらには槍立石､駒の爪石など変わった形の穴があいた巨石があることから、前述の大蛇退治の伝説の元になったのではないでしょうか。

雨引神社の例祭として、毎年８月 14 日に奇祭といわれる「城屋の揚松明」というお祭りが行われております。

古い文献に「大松明の祭りめずらしき祭りにて年の豊凶を試（す）」と見られている奇祭で、現在は京都府と舞鶴市の登録無形文化財となっています。

長さ五丈三尺（16 メートル）の太さ一尺（30 センチメートル）くらいの丸太の先端に径五尺五寸（1.8 メートル）くらいほどの松明を巻いて立て、下からヒノキの小松明を投げ上げて点火し、燃え盛ると大松明先端に立てた御幣竹が倒れるのですが、倒れた方向によって豊穣を占うというものです。

大松明の柱(境内広場)

神社境内の広場で行われ、当日は、地域の皆さん総出で朝から大松明造りなどの準備を進めたうえで祭りを始め、夜の10 時頃から若者がヒノキの割り木に火をつけた小松明を大松明に向って一斉に投げ上げる。

15 メートルの高さに投げ上げるのですから、沢山の光の筋が大変美しい。

そして、大松明に火が付くとやがて大きく燃え上がり、松明の中に仕込まれた孟宗竹が弾けて大きな音を立てます。

城屋の揚松明

クライマックスは大松明が崩れて大きな火の玉となって地上に落下。大松明は倒され祭は終了します。

なお、大松明の高さ 16 メートルというのは大蛇伝説の大蛇の体長と同じといわれ、また祭りには大蛇に擬した縄が登場したりして、大蛇退治の際の大蛇が御神体であることを意味する要素もあるようですね。

一度祭りを見に行きたいと思っていますが、昨年、一昨年と新型コロナ流行のため残念ながら中止となりました。

今年行われれば、ぜひ見に行きたいと思っています。

※ 今回の記事には、「城屋の揚松明」の写真など城屋地区「そよご会」編纂の城屋地区の郷土史「火祭りの里城屋」を参考に寄稿しています。